
機械の夢

Silk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械の夢

【Nコード】

N8778V

【作者名】

Silk

【あらすじ】

初投稿です。

古いSS読み漁っていたら書きたくなってしまいました。

拙い文章ですが、お暇なときに読んでいただければ幸いです

第01話

無機質な音を鳴らして扉が開き、入ると同じく音を鳴らして閉まる。

「おわった、の？」

「ああ…」

強襲型戦艦ユーチャリス。そのブリッジで俺は、長い薄桃色の髪を持つ少女…ラピスの問いかけに答える。

ブリッジには、今しがた破壊した戦艦の残骸が映し出されている。

火星の後継者…俺の人生を狂わし、周囲にも害を及ぼした俺の…いや、火星で生まれた者の敵。

首謀者であり、先導者だった草壁とその一派が拘束され、怨敵である北辰を討ってから二ヶ月。中核を失っても、火星の後継者は無くならなかった。

アカツキの話じゃ、元No.3だった南雲という男が中心になっているらしい。未だに戦力を保有している辺り、やはり支援を行う勢力がまだ要る。

「…」

モニターから目を放し、艦長席に腰を降ろすとラピスが近づいて来た。

トコトコと足音が聞こえるのは、アイツの趣味だろう。

「アキト…だいじょうぶ？」

「…ああ。ラピスも疲れて無いか？」

リンクを通して何かを感じたのか、ラピスが心配そうな声を出した。

身体的には少しダルいが、以前の戦闘に比べれば楽なものだ。多対一の戦闘には変わらないが、相手に北辰や六連クラスの敵は居ない。

相手を自由にさせない戦闘が続けられるなら、ブラックサレナを駆っている限り負ける - 死ぬ - 事は無いだろう。

いつも通り、敵の戦力を確実に削っていくだけだ。

「アキト？」

「ああ…すまない。やっぱり疲れてるのかな？」

沈黙していたのが気にかかったのだろう。見上げてくる視線にハツとなり、ラピスの頭を撫でる。

目を閉じて袖を掴むラピスに、自然と口元が緩む。同時に軽く胸が痛む。

俺の復讐に巻き込み、人生を台無しにされた少女。幼い手を血で汚し、命を奪わせた。その事は悔やんでも悔やみ切れない。例えばラピスの助力無しには復讐が遂げられ無かったとしても…

『お疲れのところ申し訳ありませんマスター！。ネルガルより通信が入ってますが、どうなさいますか？』

オモイカネ型AI。通称ラムダ。

ユーチャリスに積み込まれた頭脳とでも言うのか？多少お節介が過ぎるが、幾度も死線を共にした俺のもう一人の相棒だ。

「繋いでくれ」

モニターが一転し、良く見知った顔が二つ現れる。アカツキにエリナだ。

「やあ。元気かいアキトくん。出来れば連絡は定期的……」

「定期連絡ぐらい入れなさいよ！」

アカツキの会話に怒声を被せるエリナ。だが、口調とは裏腹に顔は笑っている。

「一週間前にしただろう。それにまだ補給は必要無いからな」

実際、前に補給を入れてから昨日まで戦いらしい戦いも無かった。商船を装った船を改めてはユーチャリスで逃げ道を防ぎサレナで狩る。A級ジャンパーの能力は非常に使い勝手が良い。

いつ何処に居ても、CCさえあれば貨物船に潜り込むなんて雑作もない。

『休息と栄養摂取は急務かと思われず、マスター』

「煩いぞラムダ」

五感が不自由な俺に、正確な疲れの概念は無いに等しい。例えば全力疾走を限界まで行おうが、限界直前までは全力を出せる。限界は疲労の限界に等しい。今までの経験上、この後サレナで、十時間くらいの耐G訓練をしても乗り切る自信がある。

「アキトつかれて、る。からだ、やすみたい…って」

……………ふう。

俺はラピスのこの視線に弱い。それを理解しているのか、最近はラピスに良いようにされている。

「アカツキ、明日ネルガルの月ドックを借りたい」

「了解。僕としても君とは少し話さないといけないからねえ。助かるよ」

「何故今日じゃないのよ？」

「今日潰した船に、嚴重に守られた船があつてな。味方の船を囷にして逃げようとしたところを潰したら……ラムダ」

『ハイ、こうなっちゃいました』

モニターにバツタが現れる。

丁度バツタが、運び込んだコンテナを開ける所だった。

…ドン！…

眩い閃光を發し、コンテナがバラバラになっていた。作業をしていたバツタは、焦げてはいるが大丈夫のようだ。

「え」と

「これで28…だ」

「…ダミーだったってこと？」

「分らん。只、定期的に通信をしていたみたいでなブリッジを潰したら船体が開いて大小合わせて三百近くのコンテナが射出された」

今も放出されたコンテナをバツタが集めて来ている…何を隠しているかは分らんが、奴等の事だ…ろくなものじゃないだろう。

「分かったよ。まあ、全部ダミーで君をそこに止めるのが目的かも

知れないからね。作業が終わったら直ぐにこっちに来てくれ」

「分かった」

「ラピス。貴女に似合いそうな洋服を買ってあるからね」

… エリナの言葉に頷くラピス。以前に、エリナから貰った服を似合うと言って以来、エリナの着せ替え人形になってたりする。

未だに、他の人間に対しては視線を合わせようともしない。それでは不味いと色々努力して（主にアカツキ）みたが、どうも他人の気配と言うのか？少しでも邪気を感じると即座に逃げてしまう。

過去の体験のせいか、他人の雰囲気はかなり敏感になっているのかもといネスが言っていた。

「それじゃ、朗報を待ってるよ。じゃあまたね」

アカツキが手を振りながら消えた。しかし、俺は…

『マスター？どうかされましたか？』

「いや、何でもない。それよりも、コンテナの回収と検査、破棄をするのにどのくらい掛かる？」

『このまま妨害が無ければ、二時間で完了します』

「分かった。では俺はサレナで」

『マスターは少し休んでいて下さい。昨日から弾薬補給を繰り返しては戦闘を行っていたのですから』

「まだ大丈夫…」

「ラピスも眠たいでしょう？」

「う、ん」

袖を掴む手が手を掴んできた。

確かに、昨日はかなり無茶をした…ラピスは俺のサポートしていたから、睡眠時間をかなり削っていた筈だ。

「……ラムダ、ここにずっと居るわけにはいかない。船を移動させてくれ。作業効率は考えなくていい」

『了解ですマスター。敵の反応が出ましたら起こしますので、それまではゆっくり休んでいて下さい』

「ああ…すまない。少し気が回らなかった…有難う」

『私もラピスもマスターが好きです。全てを一人するのは大変です。荷が重くても、分けられるのなら喜んで背負います』

「…オモイカネもそうだったが、お前はもつと変わっているなラムダ」

『私のマスター…ご主人様…がそうですから』
「~~~~」

ん？

見ればラピスが腰に抱きついていた。

「どうしたラピス？」

徐々に力を上げようとしているのだろうが、平均的な同じ年代の少女にも負ける腕力ではさして問題も無い。

「ラピス？」

「わたし~~~~も…っ」

………は、全く俺の回りは…良い奴ばかりだな。

だが、俺は………

「ああ。有難うなラピス」

俺は逆にラピスを抱える。キョトンとした顔が印象的だったが、直ぐにそのままもたれかかってくる。

『……………いい あ』

「？じゃあ後は任せる。何か分かったら連絡をくれ」

『はいマスター』

…シユツ…

………マスターはラピスを抱いたままブリッジを出ていった。

あの調子では、またラピスの部屋のベッド脇で寝ることになりそうですね。

進路を決めて、探索用のバツタを増やす。

私の名前はラムダ。強襲型戦艦ユーチャリスのAI。マスターに名前を頂き、共に歩んで来た…

私はマスターの、私はマスターのマスターのマスターの……………

「さて…彼に何と言おうかねえ」
「なにがよ？」

「さつき連絡があつただけど、今度の連合会議で火星の後継者とコロニー襲撃犯に関する話し合いが議題に上がる」

顔は笑っているが、彼を包む雰囲気は真剣そのものだ。

「…でも、彼が行なつた事の経緯は知られているのでしょうか？」

「ああ。草壁は詰問に対して全てを答えているらしいからね。彼らに行なつた非人道的行為や、テンカワ君が行なつた行為が、自分達の計画を妨害していたという事もだよ」

「だったら」

机に両手を叩きつける音が広がる。音が消えると、その場は空気が乾いた様に静かに感じる。

「…情状酌量？君も分かつてるだろう。そんなものはないよ」

悲しいくらい呆気なく、沈黙は崩された。

「元木連の軍人が中心だったけど、軍内部の反乱と取られても仕方がない状況だったんだ。そこに、コロニー襲撃で悪名高い彼を釈明する……そんな発表なんてしやしないよ」

「だったら！」

「無茶は言わないでね。草壁は全てをって言つたよね。彼の行動にネルガルが関わっている事はもうバレちゃってるよ」

「じゃあどうするのよ」

「どうしようかねえ…ぶつちゃけテンカワ君が死んでくれるのが一番なんだけどね」

再度乾いた音が広がる。

誰かが誰かの頬を叩いた音だ。

「…痛いよ」

「冗談でもそんな事言わないで」

「まんざら冗談って訳でもないんだけどねえ」

「ちょっと!？」

「落ち着きなよ。つまり……」

静かな部屋に男の声が響く。それは新たな騒動の種になる。しかし、女はその言葉に唇を緩めた。

- -

「スウー スウ……」

「相変わらず寝付きが良いな」

ラピスの部屋はアキトの部屋の隣に位置する。

ラピスはアキトに依存し過ぎている。本当の意味で他人を感じた事もあるが、リンクで繋がった事が決定的だった。

リンクの同調率を上げれば、思考の共有すらも行える。そうでなくとも、単純な感情の起伏くらいなら意識せずとも伝わってくる。

他者に対し恐怖と空虚が渦巻いていたラピスにとって、アキトの……プリンスオブダークネスの狂気……以前の他人を思いやる心が、少なくなっていたラピスの感情を刺激した。

アキトの目となり、アキトの耳となり、アキトの手に、アキトの足に、アキトの……アキトの……アキトの……

いつの間にか口癖になっていた言葉。まるで、自分に言い聞かせているような呪文・呪い……。ラピスにとって至福の瞬間……アキトの為にアキトと繋がっている。必要とされている事の再認識。それが少女の存在意義と言わんばかりに。

今でこそ落ち着いているが、アキトの説得や時間が徐々にラピスの依存症を抑え、部屋を分け一人で就寝出来るようになった。

アキトを掴んで放ないラピスに、彼は諦め気味にソファアに座る。

ユーチャリスに乗り込み、今と同じ状況で床に腰を降ろして寝るアキトに業を煮やしたラムダが製作させた物だ。

「……俺は。どうしたら良い……」

瞳を閉じ、膝に乗せたラピスの頭を撫でる。

「アキト……ウ」

ラピスは夢を見ていた。

アキトが微笑み、隣に自分が立っている。幸せだ。これが何かは分からないが、自分が幸せだと言うことをハッキリとは分かって無いが、自覚はしているかも知れない。

アキトの笑みが消える。いつの間にか、隣にいたアキトが消えた。

ス

振り返る。

7

アキトが居た。見ると同時に駆け出す。

距離が縮まらない。近づいた分だけ離れていく。

苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。
 苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。

「アキト…アキト！」

アキトの名を呼ぶが届かない。アキトの顔が見えた。表情が、見えた。唇が動いた。

アレは何？聞こえない。アキトの声が……アキトが感じられない。
苦しい。苦しい苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦
しい苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい苦しい。苦
しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。

「苦しいよ。アキト……」

「さよならだ。ラピス」

!!!

アキ、ト……アキト……胸が、痛いよお。

「アキト!!!」

「敵か！」

アキト。

近くにアキトの顔がある。安堵と同時に飛び付いた。

「どうしたラピス？」

目元から頬を何かが伝う。

「アキ、ト…アキトオ」

「怖い夢でも見たのか？」

アキトの手が目元を拭う。

まだ胸が痛い。アキトの言葉がまだ耳に残っている。

さよな…嫌！！聞きたくない。

「アキト…何処にも行かない、で。私を置いて何処にも行かないで…」

……？

リンクを通してアキトの感情が分からない…でも、触れたアキトの感触が今の私を支えてくれる。私はアキトの…アキトの…

第02話（前書き）

書き始めて思ったことですが、毎日更新している方に敬服します
あ、あと私の知識は浅いです。本編と劇場版は見ましたが、劇場版
のパンフ等の設定は頭に入っていません。主に他の方の2次SSが
元になっています

第02話

『マスター？また、何をしたんですか？』

ブリッジに入るなり、そうラムダが聞いてきた。

理由は分かる。いつもは横に佇んで歩くラピスが、今日はガツチリと手を握って離れない。

嫌な夢でも見たのか、リンクを通して感じる感情は胸を伝う悲しみだ。

「夢見が悪かったみたいでな……ラムダ、何かしたとはどういう意味だ？」

『マスター……マスターがラピスに甘いのは自覚していらっしゃいますか？ラピスに対する一挙一動が、ラピスを猫っ可愛がりしてるんですよ？今までの行動を振り返って見てみますか？』

さも意外そうにラムダが言う。

いや……それなりに自覚はしてるが……いやまあ、今見えたマスター観察日誌ってなんだおい。

「ラムダ……プライバシーは誰にでも許される権利だと俺は思うぞ？」

『マスター……私は面倒見が良く、娯楽の少ないAIの趣味を許すマスターが大好きです』

「ラムダ……俺は物分かりが良く、潔く悪戯を止める奴が好きだな」

『マスター……私にも譲れない線と言うものがあります』

「そうか……ラピス。ラムダにアクセスしてみないか？」

「？」

暗い表情で手を握っていたラピスに顔を近づける。キョトンとした顔をしていたが、再度やりたくないか？と囁いたら頭を横に振った。

『ラピス……私と貴女は歩み寄る余地がありますよ……』

突如、ビッシリと埋め尽くすウィンドウがラピスを包む。

「ラムダ、おまえなに……を……ラピス？」

数秒後、ラピスの回りからウィンドウが消えると、そこには惚けたラピスがいた。

『ラピス。楽しみは分かち合うものです。判りますね?』

囁きは何処からか。俺の手を離すと、ラピスはクルッとラムダと俺を遮るように立つ。

「う、ん」

「……………」

言葉が出ない。

まさか、ラムダがラピスを懐柔する日が来るとは…

リンクを通して感じるラピスの感情は…あまり理解できなかった。時々妙な声が聞こえるのが怖い。ラムダ…一体何を見せた?

『マスター…ラピスにとって、自身の記憶はマスターと出会ってからです。短くても至福の時というのはいっつも見ても嬉しいものです(このデータがある内はラピスは私に協力的ですよ?フフフフ)』

「性悪AIめ…」

日に日に人間臭くなっていくな。俺の行動記録など撮っても面白くも無いだろうに。

『ラピス…お許しが出来ました。今度暇なときに、マスターとラピス001から見ましょうね』

「うん」

ラピスにしては元気の良い返事に頭を抱える。リンクから流れてくる感情に反論すら禁じられる。

…俺は、いや……ラピスは俺から離れないと駄目だ。このままだとラピスに良くない。

そう思う傍ら、三人一緒に居たい……そんな許されざる感情が生まれるのを必死に否定していた。

俺は咎人…赦されざる殺人鬼。

「ラムダ。射出されたコンテナはどうだった?」

『…回収は終わりましたが、検査は済んでいます』

「なに?何か問題でもあったのか?」

時間はかなり余裕が有った筈だが…

『いえ…、私の体をこれ以上汚されないよう爆破しないように解析から入ってましたので…』

「そうか、残りはアカツキへの土産にするか」

爆破が起きると若干だが船体が揺れる。恐らく揺れを抑えようとしていたんだな…全く、余計な事に気が回るな…

「ラムダ。ジャンプフィールド発生準備。ラピスはアカツキに今から行くと連絡を入れてくれ」

ラピスが自らの席に着く。

『完了です』

「おわった、よ」

「……ラムダ」

『はい？』

「何番まであるんだ？」

『……マスター。貴方に名を頂いてからの歳月は私を育てました』
隙があれば絶対に確保しよう…

「ジャンプ」

- -

「お帰り」

「エリナか」

ユーチャリスを降りるとそこにはエリナが居た。

「久しぶりね。でも、ネルガル - わたし - としては、連絡は定期的に入れて欲しいんだけどね」

「……」

「はあ…まあいいわ。無事に帰って来たし、ラピスも元気にしてた？」

こちらの沈黙に、頭に手を当てて溜め息を吐くと、今度は笑顔でラピスに声を掛ける。

「……うん」

反応は悪いがこれでも成長したものだ。最初の頃は…

「何か食べたいものあるかしら？」

「……………」

「ラピス。この服着てみない？」

「……………」

「……アキト君のところに行こうか」

コク。

だったらしいからな。いくらリンクで繋がって思考を読めるからと言っても、俺以外の人間に対して興味を示さないのは不味い。

時間を割いて、エリナが悪い奴じゃ無いと説得してやっとなを聞いたくらいだからな…

「会長が大事な話があるそうだから、ラピスは私とお着替えしまし
よう」

「…アキトといっしょ」

「お着替えしたらアキトくんが喜ぶわよ」

エリナから視線が送られる。

…事情があるのか？

「……ラピス。エリナと行け。話が終わったら迎えに行く」

頭を撫でると、少し不満そうだったがエリナの横に移動した。

「場所は？」

「いつもの所よ」

「分かった」

言って、アカツキの待つ部屋に向かう。

…何時もならダラダラと愚痴を溢すのにな……何かあったのか？

『マスター』

「ラムダか、どうした？」

コミュニケーションをオンにする。

『はい。これからシステム調整を行いたいのですが、宜しいですか？』

「？構わないが…ラピスを呼ぶか？」

『いえ、自律回路の点検ですので私だけで大丈夫です。ただ、一時間は連絡が出来ません』

「…何かあったのかラムダ？」

いつもと何か違う。違和感というか、勘がそう言っている。

『夢を、見てみたいです』

「なに？」

『ある書物に書いていました。人間は就寝中に夢を見ると。それは願望や、思考を反映したものだ…折角の機会ですので試してみようかと』

音声の抑揚が気になるが…まあ、大丈夫だろ。

「分かった。寝ぼけてくれるなよ…お休みラムダ」

『いつもと逆ですね、お休みなさいです、マスター』

「コミュニケが消える。」

さて、アカツキのところに行くか。

- -

「やあ、久しぶりだねテンカワ君」

「昨日会った筈だがな？」

部屋に入るなり、ソファに腰かけたアカツキが片手を上げてきた。

「あれは会ったなんて言わないよ。連絡しただけさ」

同じだと思うがな。

アカツキ・ナガレ。未だに掴めないところもあるが、味方だと言うのは間違いない…か。

「それで？」

「まったく、君はせっかちななあ。少しくらい……そうだね。君には伝える事が四つある」

対面に座ると同時に気圧を掛ける。勿論、殺気じゃない。

「聞かせてくれ」

「艦長の退院が決まったそうだよ」

「そうか」

「それだけかい？ 仮にも、奥さん助ける為にあんな大立ち回りをしたってのに」

ユリカ…か。

アイツ達の事を考えると思考が冷める。それは、無意識の内に俺がやっているといネスは言った。許されない罪と、赦されない罰を欲しているからだ。

「関係ない。俺とアイツは他人だ。戸籍上でもそうになっている」

「じゃあルリ君は？」

「…彼女はアイツの家族だ。そこに俺・罪人・の存在は必要ない」
「素直じゃないよねえ」

「アカツキ…俺の答えは変わらない。あそこはもう俺の居場所じゃない」

バイザー越しに真剣な視線を感じる。

「分かったよ。じゃあ二つ目。ルリ君なんだけど…軍はルリ君を危険視している。今までは只のMC・マシンチャイルド・だと認識していたけど…この間の一件が不味かった。彼女がその気になれば、自分達も同じ目に会うかも知れないからね」

「そんなこと…」

「無いと言えるかい？ 事の始まりは君との再会だ。軍も馬鹿じゃない。あの戦いで、君に対する彼女の行動については、表に出てこないだけで問題視されているよ」

…アカツキはこう言いたいんだろう。

「俺がこうして居る限り、ルリちゃんに迷惑が掛かる…か」

「テンカワ君…そうやって自己否定ばかりしていちゃ駄目だよ」

「軍はどう動くつもりだ？」

「仮にもミスマル家の養女だからね。監視をつけて、例の亡霊事件の犯人を追わせるみたいだよ…連続コロニー襲撃犯をね」

…あの襲撃をしたのが俺、テンカワ・アキトだとは報じられていない。戸籍上じゃ俺は死亡した事になっているしな。ユリカが生きていた事はもう知られているが、実際はあの地獄を生き延びたの

は俺だけ…だがそれを証明は出来ない。唯一それを示せるのは、俺を捕まえるか…ネルガルが俺を売るかだ。

「ねえテンカワ君」

「なんだ？」

「君はなんでまだ戦うんだい？」

「奴等はまだ生きている…奴等の息の根を止めるまで俺は…」

うつ向き加減に、齒を食いしばる。絶対に許さない。死んでいった同郷の為に、奴等の存在を俺は認めない。

「それじゃ一生終わらないよ。火星の後継者はいずれ鎮圧される。そうなったら次はクリムゾンかい？それが終わったら？」

「なら死ぬまで戦い続けよう」

「…三つ目、ラピスくんはどうするつもりだい？」

「…アカツキ、俺は」

「駄目だよ。答えを他人任せにしちゃ。少なくともラピスくんに関して、君は誰も頼っちゃいけない筈さ」

厳しいな。

答えは出てる。ラピスは俺と一緒に居ちゃいけない。不幸になるのが解っている。

「…ラピスは俺を自分に重ねている。笑うことも、楽しいことも知らずにいたんだ。そこに俺みたいな奴が入り込んで利用した…俺の目、俺の耳、俺の…そんな口癖をあの子に教え込んで、血で手を汚させた。これからは、普通の幸せを感じて欲しい」

「それをラピスくんが望んだんだ」

「違う！！」

ソファから勢い良く立ち上がる。

「ラピスには違った人生を与えられた筈だ！普通に学校に通うことは出来なくても、ルリちゃんみたいに生きること出来た筈なんだ！」

「出会わなければ良かったとも言っのかい？」

「…そう」

そうだ。そう口にする前に口が止まった。アカツキから感じる怒気を感じたから。

「さっきから聞いていたら、君が言うことは筈だの何だのもう過ぎた事さ。僕が聞きたいのはこれからの事だよ」

「…ラピスはエリナに任せる。アイツならラピスに普通の」

「無理だね」

「何故だ？」

「忘れたのかい？君の五感には彼女が補っているんだよ？どうやって生活するんだい？それに、ナノマシンの鎮静も自分じゃ出来ないだろう？」

「イネスがラムダとのリンクシステムを開発しているだろう」

「…あれは非常手段だよ。今ほどの安定は望めない。それに、君とのリンクを切ってラピスくんが生きていけると思うのかい？」

以前の一度、ラピスと離れて一週間程検査受けた事がある。その時ラピスは深い眠りについた。遠く離れた俺を補助する為に、かなり無茶をしていたんだろう。エリナから連絡を受けて帰らなければ本当に危ないところだった。

「だからだ…このままじゃ、俺が死ぬまでラピスに苦勞を強いる」

「…テンカワくん。君が罪を許せないのは分かる。でも、責任を放棄させはしないよ」

「責任だと？」

「そうだよ。ラピスくんに対して負い目を感じているなら余計にね。幸せな人生？それをあの子が君に決めて欲しいと言ったかい？あの子は君と一緒にいることを望んだんだ。なら君はあの子と一緒にいて上げるべきじゃないのかい？」

「それは方便だ。今ならまだ…」

「方便？結構じゃないか。皆が笑っていられるならずっと良い…君は、君自身の我が侬をラピスくんに押し付けているだけだよ。君は自分に取っての幸せが許せないだけさ」

平行線だな。

何でだ…何で俺のまわりにはこんなにも……………

「アカツキ…」

「なんだい？」

「ラピスに最後の確認を取る。それでラピスが一緒にいる事を望んだら好きにしろ」

「そうかいこれは四つ目だったんだけど、君には姓を捨ててもらう。そして、ネルガルの運輸業務を手伝って貰おうかな？」

既に決まったようにアカツキは言う。表情はしてやったりの笑

顔。だが、恐らく…いや、間違いなく怒りに変わるだろう。ラピス

……俺は、お前に恨まれるかな？

第03話（前書き）

作業用BGMを聞きながら書いていると、内容がかなり左右されるような気がします。

第03話

「それじゃ、次は」

白いフリフリを畳んで、エリナが新しい箱を開ける。

これで何枚目だろう？ ちょっと疲れる…でも…何でだろう。視線が離せない。

「あ…」

黒いフリフリ。アキトが何時も着ている服と同じ色…

「やっぱり気に入ったかあ…私としては黒より白の方が良いと思うわよ。だからこれは」

「ん…」

エリナの服の裾を掴む。……黒い服。箱に戻そうとしたから。

「冗談よ。ラピスは何でも似合うわ」

「エリナ、いじわる」

服を取ろうと両手を挙げると服を着せられた。

「うん。やっぱり似合うわ」

「……………」

鏡に私が映る。

襟に入り込んだ髪を直す。服、アキトと同じ色……だけど髪は違う。でも良い。アキトが綺麗って言うてくれたから。

「ラピス？」

エリナ、顔近い。

「……アキトといっしょ」

「もう！！堪らないわ」

！！

「エリナ、くるしい」

「あ、ごめんねラピス。でも、ちょっと反則だわ」
？

時々エリナの言うこと分らない。

『ラピス』

「アキト」

アキトの声。聞こえると凄く落ち着く…

「え？アキト君？」

『今からそっちに行く。エリナにそう伝えてくれ』

「わかった」

「どうしたの？」

「アキトがくるって」

「そっか。ラピスはアキト君とコミュ要らずだもんね。それじゃ、とっておきを出しましょうか」

がさがさ音がして、新しい袋から小さな物……なに？

「ラピス」

「……なに？」

黒くて小さな物が二個。ちょっと細長いけど折れ曲がつてる。

「一度やってみたかったのよねえ。さ、こっちにいらっしやいラピス」

「いや」

エリナからラムダと同じ感じがする。アキトと話してる時のラムダと同じ…

「大丈夫。絶対似合うわ。アキト君だって好きな筈よ！絶対」

「…………アキト。」

『どうしたラピス？』

「…なんでもない。」

『？ああ』

笑顔のエリナ。私は笑うのは解らないけど、良くアキトにあれが笑顔だって言われる。自然となるもの……自然？

黒いものを持ってエリナが私を見る……私、——じゃない。

「待たせた………エリナ」

「あら？遅かったわね。私はもう堪能させて貰ったけど、どう？」
どう…っと言われてもな。

目の前にはラピスとエリナが居る。ラピスはエリナの嗜好につき
合わされている…それは分かっているが、まさかな。

「お前にこんな趣味が有ったとはな」

「何よ、別に可笑しくはないでしょ？可愛いんだし」

まあ…確かにな。

「わたし、いぬじゃない」

マントの端を持ちながら言われてもな。

所謂 - いわゆる - コスプレとでも言うのか？折れ曲がった犬耳
を付けたラピスは、散々エリナに抱き締められたんだろう。疲れた
という感情が伝わってくる。

「そうだな。だが………なんだ、似合っているぞ」

「うそ。アキト、こころがわらって、る」

「嘘じゃないぞ。笑いっていうのは、楽しい時もそうだが嬉しい時
にもなるんだ」

頭を撫でる。

分かってないか。

「ラピスは無いか？」

「ん」

首を縦に振る。

「嘘だ」

「うそ。じゃない」

抑揚の無い声で発せられた言葉に…
不意に気付いた。

俺はラピスに………そうか。そうだよな…

膝を折って視線をラピスに合わせる。頭に置いた手は後頭部を触
れている。離そうとしたらラピスに掴まれたからだ。

「エリナに服を着せて貰ってどうだった？」

「エリナ、こわかった」

「そうか。そうだな…俺も怖いぞ」

「ちよっと！」

エリナが批難の声を上げるが無視する。

「でもな、ラピスから俺は助けると言われ無かったぞ」

ピクツとラピスが動く。

「怖かったんだろ？」

「う…ん」

自分でも戸惑っているんだろう。いや、考えてるのかもな。

「ラピス…それは怖いんじゃない。困ったと言っただ」

「こまった…こまった、こと？」

「ああ。嫌じゃ無いが…ちよっと駄目、かな？俺がラピスと風呂に入らなくなってから、俺を風呂に連れて行こうとした時、ラムダはどうしてた？」

「わらって、た」

「俺が嫌なことをされてたらラムダは笑うかな？」

「…ん」

一瞬の間を空けて首を横に振られる。

「じゃ、何でラムダは笑っていた？俺が困っていたのに」

「わからない」

「嘘だ。ラピスはエリナが嫌いかな？」

「ううん」

即座に首を横に振る。

エリナが嬉しそうに拳を握っていた。

「でもエリナが怖かった？」

「ん」

今度も即答。

ガクツと頭が落ちる。

「それが答えだ。勿論全部がそうじゃないが、ラピスはエリナが好きだが嫌いじゃない、だから困ったんだ」

「…よく、わかんない」

「ああ、そうだな。今は…それでいい。でもな
これだけは言っておきたい。」

「その服は気に入ったか？」

「ん。アキトといっしょ」

「いつも着ていたいかな？」

「ん」

「じゃあ、その服を渡された時どう思った？」

「…むねがあつかった」

「それは嬉しかったからだ。ラピスが良かったと…ありがとうと言
いたくなつたからだ」

「ありがとう…かんしゃのコトバ…エリナ、ありがとう」

「…こつちもよ。楽しかったわラピス。ありがとうね」

「ん。アキト、ありがとう」

「ラピス…そういうときはな」

俺はラピスの頬に両手を押さえる。

「アキトくん!？」

そのまま親指で口の端を持ち上げる。

「フアキト？」

「嬉しい時や楽しい時は、こうやって笑うんだ」

「わら、う？」

……………

手を離すと、ラピスが俺達を見上げながら微かだが笑った。

「アキト、エリナ、ありがとう、う」

「……………ああ」

反射的に、本当に反射的に俺も笑っていた。

…あの時以来か。

ルリちゃんとの予期しない会合。ほんの一瞬だったが、俺はルリ
ちゃんを見て笑っていた。

「アキト……………ルリのこと、かんがえてる」

「ラ、ラピス？」

「酷いわねえ〜ラピスと話してる時に、別の子の事考えてただなんて」

「…いや、それはだな。そういえば、ラピス。なんで俺にも礼言っただ？」

く…咄嗟にしても、何を言っているんだ俺は…

「アキトにおはよう言うときも、おやすみ言うときも体が変…だから」

………やぶ蛇だ。

「アキトく〜ん」

ああ。本当にやぶ蛇だ。

それから少しの間、俺はエリナにいじられた。

………俺はラピスから、笑顔も奪っていたんだな。

「…駄目ね」

女はデスクの上に束になった書類を置く。目元に浮かぶ疲労の後が、ここ数日彼女が満足に寝ていないのだろうと感じさせる。

時間が足りない。女は以前にそう言った。

ナノマシンという技術が人体に与える影響と可能性。だがそれは、幾度の失敗と実験によって招かれるものだ。

だが、女が今診ているのは目標が無い実験の結果だ。多量のナノマシンを何種類も打たれた結果、脳に多大な負担を強いる。結果もたらされたのは五感の損失。

「まさか、自分達も理解できていない物・ナノマシン・を投与してたなんてね…」

つくづくあの科学者…いや、下衆は狂ってる。

そう女は思う。

結果として、彼女の患者が行われた実験について、人体に与えた

影響を結果として記録されていたに過ぎなかった。幾人の犠牲者を出して…それぞれの結果からどんな効果が伺えるか……女も科学者。だが、これは最早虐殺だ。ジャンプに必要な因子は少しずつ解明されている。

彼らに取って、ジャンプ先を遺跡に伝える事が出来るA級ジャンパーを、人為的に生成する事はクーデターを成功させる為の一つの因子だったかも知れないが、その結果がA級ジャンパーを拉致しての人体実験…当初の目的はクーデターの邪魔をさせない為だったのかも知れないが、それでもその非人道的行為は許しがたい。

「はあ…」

溜め息も吐きたくなるだろう。

一部とはいえ、女が愛しく思う患者に対する実験内容…加えて、期待していた患者を治す手掛かりが、このような結果だったのだから「時間がないわ…何か見付けないと」

言って、積み上げられた一冊に手を伸ばす。

記録媒体が紙しか無いのではない。映像記録も多数発見残された。見てみたが、数分も経たない内に映像は消える。女と一緒に見ていた一人が投げつけたものによって。

「狂ってる」

漏れでた言葉が耳に残っている。

女もそう思った。

正しい未来の為に協力出来て嬉しいだろう？

そう一人の科学者が被験者に笑いながら言っていた…正しい未来。こんな事の上に立つ未来が正しいと、本当にそう思っているならお笑い草だ。

新たな新薬の製造に犠牲が生じるのは必然…だが彼等は、自らの為だけにそれを行なっている。目的は人を悪魔に変える。だが、そんな事が理由にはならない。

やった事の責任を追うのは自身だ。正常な人間なら、他人に理不尽な死を押しつけたりはしないだろう。そういった意味なら、女の

患者…そして関係者も罪を背負った。

ある者は慰謝料を、ある者は己の生を……女もまた、一人の加害者である。だが、女は患者に好意を…愛を感じている。生きていて欲しいと、少しでも長く彼に触れていたいと願う。

それが、患者の意思に背くものだとして理解していても。

「……………お兄ちゃん…」

- -

『マスター…』

…マスターは怒るでしょうか？

『…これで完了ですね』

今私は、格納庫の一室でバツタを制御しながら作業を行なっている。

マスターに嘘を吐いてしまいました…

その事が気に掛かる。しかし、言えばマスターは良い顔をしなかったでしょう…でも、私は…

私は壊れてしまったのでしょうか？

マスターに対して虚偽をしました…本来なら許されません。してしまう事も考えてませんでした。だから問いました。検査を行うのは私ではありません…そう言わなかっただけです……………方便ですねいや、一プログラムでしかない私がこんな事を考える事自体、可笑しな事なのでしよう。

『結果は真っ白…いや、だからこそ怪しいですね』

コレがああ男に関わりがあるのなら…………マスターはどう思つのでしょうか…

『……………』

後一步…………越えてしまえば後戻りは出来ないでしょう。下手をすればネルガルからも…

『マスター…』

内在する記憶層からマスターのデータを読み取る。

出てきたのは、ラピスを抱き抱えるマスター。

ネルガル重工シークレットサービス（以後NSS 所属、火星生まれのA級ジャンパー。異常とも言える訓練（と呼べるなら）を、復讐という感情で乗り越えて目的を遂げる。

戦闘技術はエステバリスを除けばB程度。情報戦もそれほど高い技能は持たない。

ただし、身体能力は過去の実験の副作用で、脳の制御を外れた為か常人を超えた力を出すことが可能。瞬発力や単純な力に関してはA+。

痛覚を失っていることによつて、拷問にも等しい機体の制御に成功。

携える弓は戦艦ユーチャリス。射る矢はブラックサレナ。

たった二機とは思えない戦果を叩き出し、ワンマンオペレーションシステムを搭載したユーチャリスの有用性を証明。ブラックサレナに至つては、多対一を前提に作られた異能の機体であり実験搭乗者を幾人も壊している。

ただし常人を超えた力を手に入れた結果。その代償として身体は加速度的に消耗し、生存時間を大きく削つた。

私はマスターの、私はマスターの。私はマスターの為に……………私はマスターの為に、何が出来てますか？

『……………ダウンロード開始』

ナノマシンでリンクしたマスターとラピスは二人で一人。ナノマシンという媒介を介してならば、人は真の意味で集合体と成りうる可能性の証明。

「……………マスター……………」

第04話

――

「ラピス」

「なに、アキト？」

「今日は俺の - 昔の - 部屋で寝るか？」

今日…事が成れば、ラピスと一緒にいるのは最後になる。最後くらいは安らかでいて欲しい。

難しい事は解っている。だが、俺にはその責任がある…ラピスの笑顔を奪っていた責任。今日ほど強く実感した事は無かった…ごく自然に、微かでも笑顔を出す片鱗が有ったにも関わらず、俺は復讐に身を任せてラピスの感情を殺していた…

「うん！」

いつもと違うことを言われたせいだろう。ラピスの動揺…いや、混乱が伝わる。

ナノマシンによる意思の伝達…制御、相互干渉。以前に俺が昔の夢を見た時、激しい感情の渦にラピスが夜泣き出す事があった。思えば、ラピスが感情らしい感情を出したのはアレが初めてだったんじゃないだろうか。

「ラピスのベッドは小さいからな…今日は俺の部屋で寝よう」

「わかった」

「……」

いつもは救われるが、今日はラピスの視線が胸を叩く…
慈しむ…なんて感情、残っちゃいないと思ってたのにな…

「アキト？」

「何だ？」

「こまってる、の？」

「……いや、ラピスは良い子だな」

リンクで感情が流れたか？

だが、先程の問答を忘れずにいたラピスに嬉しく思う。小さな事だが、俺がラピスの為に何かを残してやれたなら…俺も少しは救われる。

「アキト？」

「ん？」

マントの端を引かれる。

見ればラピスが心配そうに見上げている。

「アキト、へんだよ」

「…ラピス。もし、俺がいなくなったらどうする？」

「嫌！」

ギュッと抱きつかれる。解ってた事だ。だが、ラピスが望もうが望まないが俺は近い将来ラピスと別れないといけない。

「ラピス…お前は自由になるんだ。今ならまだ大丈夫。同じ仲間のルリちゃんの所でも…エリナやアカツキの世話にもなれる…俺と一緒に居ては何も変わらない。その方がラピスに取ってずっと良い」

「私はアキトの目、アキトの耳、アキトの手…私はアキトと一緒に独りにしないで…」

「何も、ずっとさよならってわ…」

先は言えなかった。ラピスの頬に伝うものを見てしまった。

涙…

俺からの干渉じゃない、ラピス自身の感情による涙…俺は何も言えなくなつた。

「夢でもアキト言つてた…さよならって、聞きたくない。胸が痛くなる…アキト。さよなら…って、言わないで。お願い」

こうなってしまったのは、俺に言える事なんて無い。震えるラピスの頭を撫でながら、俺は心でラピスに謝り続けた。

- -

『マ、マスター！？』

「…？どうした、何を驚いている？」

「……………」

泣き止んだラピスを連れてブリッジに入ると大音量でラムダの叫びが響いた。

同時に、投影されていた無数の映像も消える。また何かしてたな…

『どうしましたラピス？』

「……………」

塞ぎ込むように黙ったままのラピスを見て、ラムダが声を掛けるがラピスは顔すら上げずに俺の手を握る。

「ちよつと…な」

『まさか……また自分を攻めて、ラピスに何か言っただんですかマスター？』

…知っていた訳じゃないな。知ってたなら、コイツはこういう風に茶化したりはしないだろう。

「ラピスには普通の生活をしてもらいたいんだ」

『……マスター？マスターがラピスの為を思ってる事は理解しています。ですが、ラピスに取ってそれが普通じゃないと理解していますか？』

「……………」

…散々言われた事だ。

『ラピスが望んでいるのはマスターとの生活です。リンクを使用した共感でラピスに変化をもたらせました。マスターはそれを壊すつもりですか？』

「……………わ…る」

『それに、マスターにはラピスが必要です…今まで通り三人で…』
「そんな事は！！」

そんな事は何度も考えた。何度も言われた。だが、それでも俺には……………くそ。

「…すまない。俺の為に言ってくれているのにな……………」
『マスター…………』

「ラピス。ラムダ。俺に何かして欲しい事はあるか？」

気まぐれで考えた訳じゃないが、復讐が一段落して二人には何が返さないといけないと考えていた。

もしかしたら、今日が最後になるかも知れない。出来ることならやってやりたくなった。

「……お風呂！」

「うっ！」

『私は…マスターにアクセスして欲しいです』

「なっ！」

くそ……だが、まあ。

「……分かった」

「ホント？」

『マスター！？』

なんだ…その反応は？

今まで頑なに拒んできた事だけに、二人は驚きを隠さなかった。

「……やっぱりやめ…」

「駄目！」

『……分かった』

力強くラピスが手を引っ張り、ラムダは映像付きで俺の言葉を再生した。

…まさか、俺の行動全てを記録してる訳じゃあるまいな…

半ば本気で考えつつ、腕を引っ張るラピスの頭に手を置く。

「…はあ」

ああ、今日は溜め息さえも疲れそうだ。

- -

「疲れた…」

「~~~~~♪」

ほんの数十分だったが、ラピスを風呂に入れるのは本当に疲れた。

流石に一緒に入るのは抵抗があつた為、ラピスを洗う事で許してもらつた。以前も洗つた事があるが、長い髪を洗うのは一苦労だ。降り掛かる水が嫌いなラピスは、一人で入つてゐる時は髪は一度しか洗わないらしい。泡は氣に入っているらしいが、やはり洗い流すのが嫌らしい。

折角、綺麗な髪をしてるのに…そんな事を思つてたら指先で髪をいじつてた。

「」

リンクを通してくる感情に頭を搔く。これから俺が何をしようとしてるかも知らずに……何を迷つてゐる。もう決めた事だ。いくら恨まれても、それまでに成長してくれる筈だ。

「…アキト、もうねる、の？」

「いや、ラムダに話があるから部屋…ここで…待つてくれ」

「わたしも、いく」

「いや、ラピスは疲れてるだろう？直ぐに帰ってくるから待つてくれ」

頭を撫でると、小さく分かつたと言つてラピスがベッドに潜り込む。

まあ何だ。エリナじゃないが行動は、

「わたし、いぬじゃ、ない」

…しまった。聞こえてたらしい。

「ああ。そうだな。じゃあ、後でな」

「う、ん」

シュツと開いた扉が閉まる。きつとラピスは眠氣に勝てないで寝てるだろう…次はラムダだな。

「」

「お疲れ様ですマスター」

「…お前、まさか風呂まで録つて無いだろうな」

そうだったら本気でデータを奪う氣にもなるが。

『マスター？流石に私でも、そこまでしません。バツタに着替えを持って行かせたり、服を洗ったりするくらいですよ？』

「あ、いや。確かに洗濯なんかはやった事が無かったな」

考えてみれば何時も同じ種類の服を着てたせいで、その辺の頓着は無かったが…そうか、ラムダがやってたのか。

『それで、どうしたんですかマスター？』

「システムダイブをするんじゃないかったのか？」

『！？』

無数のウィンドウを、驚や！！？といった文字が埋める。

それも仕方ない。MCの補助無しに、オモイカネ型AIへのアクセスは難しい。だが、俺には通常のナノマシンだけではなく、オペレータ用ナノマシンも混在している。奴に与えられた能力を使うのに抵抗のあった俺は、出来るとは言われたが使う気はなかった。

それでなくとも、ラピスの補助で五感が戻った際に、以前とは比べ物にならない程に運動能力が向上していたんだ…いや、向上させる事に成功した。

イネスが言うには、実験用ナノマシンの副作用で細胞が変化したんじゃないかと言われた。

「…どうした？嫌か」

『とんでもないですがどうしてらっしゃったんですかますたー！』

「お前、検査でエラー出なかっただろうな…」

ふう…こいつといい、あいつといい…俺を昔に引き戻したいのか？

大した力もなく、理想を理想として見ない非現実主義でとてつもないお人好し…あの頃の俺に…

『~~~~~♪~~~~~！！？』

一定の処理？を終えて、艦長席にIFSコントロールパネルが現れる。

「いくぞ」

席に着いてパネルに両手を置く。IFSが反応して両手の先端から光の回路が走る。

人間という個が一步先に進む瞬間。自分の手足の様に接続した機械が反応する。以前オモイカネの中に入った時と同じく、IFSを通して俺は現実とは違った電子の世界に足を踏み入れていた。

「マ、マスター……」

「ラムダか？」

辺りを見渡す……白い壁に包まれたドーム状の部屋……か？かなり広いが当たり前だが調度品等ない。いや、俺の目の前には一本の綱が天井から垂れ下がっている。

「ここにマスターが来てくれるとは思って無かったので、片付けをしています。マスターの気が向いたら……その……綱を引いて頂ければ……」

何の話だ。全く……

クイツ

「あっ……！」

「……これは……」

綱は簡単に引き抜けた。天井に穴が空き、硝子が割れる様にドームが碎ける。

現れた光景に思考が止まった。

壁の先には煉瓦で出来た家があった。周囲を花畑で埋め、近くの池には滝のように流れ落ちる水が均整のとれた音を立てている。

以前ラピスの為にと、エリナが渡してきた本に書かれたおとぎ話の一枚絵。平和で幸せな時間を描いた本。今もラピスの部屋の棚に仕舞われている筈だ。

電腦世界とでも言うのか？IFS接続のおかげで良く見える。

水面を伝う音も、葉の掠れる音も聞こえる。

綺麗だな。

「マスター？」

「……お前は木じゃないんだな」

「え？」

「前にオモイカネの中に行った時は、意識体が木の形をしていたんでな。お前もそうかと思っていた」

「そうですね。この前までは木でしたが…」

？

この前だと？つまりは何か変化が有った訳か…

「お前は変わってるからな」

「マスターには敵いませんが」

いや、お前には敵わないだろうな。

近くの滝を見つめる。際限なく流れ落ちる滝は何を模しているんだろうな。オモイカネは枝や葉が記録…いや、記憶だったか…

だったらあの中央の家が記憶か？中には絵画が沢山掛かってたりしてな。

「あ、あのマスター？」

「何だ？」

「こ、こちらに…いえ…なんでも…」

良く聞こえないが…何を緊張してるんだ？

「ここはラムダが作ったのか？」

「は、はい！以前ラピスが読んでいた本を参考にしました。急造にしては良い出来に…」

「ん？他のも前は形が違ってたのか？」

「はい。何も無いのは寂しかったので色々作成中です」

「そうか………良いところだな」

「あ、ありがとうございます。あのマスター？」

「さっきからどうした？言いたいことがあるなら………ラムダ？ここには俺たち以外に人がいるのか？」

「いえ？居ませんが」

「そうか？あの家の方から気配が有ったんだが…」
ほんの少しだが人が動く影が見えたんだがな。

「…あの、こちらに来ませんかマスター？」

不意に家のドアが開く。今のはラムダか？やっぱり人の気配がするんだかな…

まあ、ここなら何があってもラムダが処理するだろう。と、煉瓦の家に入る。

…………… どういう事だ？

「ど、どうかされましたでしょうか…マスター？」

「ラムダ……なのか？」

「は、はい」

家の中は至って普通だ。何処にでもある昔話の家。釜戸があり、机があり、椅子もある。従ってそんなに驚く事も無い。だが、そこに見知らぬ女性が三指付いていたら話は別だ。

最初に目に付いたのは白い白銀の髪。色素が抜けたり、艶を失った髪じゃない。自然な、雪の様に細かな白銀とも感じる髪。

続いて、頭を上げた女性の容姿。頬を朱に染めて目を伏した女性、ラピスが大人になったと思える程に似ていた。パツと見たが、身長は俺に近い…体型はユリカに似て……

「…………… ラムダ？」

「はい」

呼ぶと再度頭を下げられた。

「いや、取り敢えず立て」

……………

立ち上がったラムダは、黒いケープを慌てて外し、黒いローブ姿になった。

「ど、どうですかましたー」

「…………… 似合ってるぞ」

指をモジモジとさせるラムダに答える。

ああ…よく似合ってる。だがこれは言わせてもらっぞ。

「お前、実年齢は……」

「マスター……」

俺の質問はラムダの叫びにかき消される事になった。

第05話（前書き）

スラスラ書ける時は楽しいのですが、頭の中で意見が堂々巡りをしてくると駄目ですね…

第05話

「しかし、一体どうしたんだ？気が付いたらその姿だったと言っても、何かあったからそうなったんじゃないのか？」

「はう……」

…調子が狂うな。

「最近……いや、お前の様子じゃ昨日今日って所だな……なら、今日のシステムメンテの時間が一番怪しいな」

俺の問いに、ビクビクと体を震わすラムダ。恐らく反応しているつもりは無いのだろう。だが、姿が変わって日が浅いなら情報意識が態度に現れている可能性がある。所謂お約束だ。

「あう……」

…少し面白いな。

「それにだ。そもそもお前らしくないぞ。思うだの何だのは、それなら前提を出して言うだろうがお前は」

「はうう」

「……………まあいい」

「え？」

「聞いたところで俺が理解できるか解らんからな……それに、話したい事もあるからな」

「何でしょう」

低い声を出したせい、自然とラムダの背筋が伸びていた。

「今日……ラピスが笑った」

「そうですね。でもマスター？それほど緊張する事ではないように思うのですが……」

「今までアイツが笑顔になった事があるか？……………無いだろう」

「はあ……」

力無い相づちが反ってくる。

「思ったよ。こんなにも大事で当たり前の事さえ俺は気付いて無か

「つたんだってな」

「マスター？」

「だから、俺は今日…ラピスの記憶を変える」

「マスター！？」

椅子が倒れる音が響く。予想通りの反応だ。だからこそ、俺はお前に直接アクセスをしないといけなかった。

「手を…いや、明日までの間でいい。何もしないで欲しい」

これは俺の罪。ラムダには関係無い。

「マスター……………お断り致します。ラピスは友です。マスターの為に…」

強制機能停止開始。

ラムダの表情が固まる。何が行われたか解ったんだろう。

万が一の為にラムダには緊急停止用のコードが入力されている。

以前、オモイカネが暴走した事で開発された、緊急の場合にAIを止めるためのシステムだ。

俺みたいな奴に与えた戦艦だ。そうじゃなくても取り付けられた筈だ。だが、それに気付いたイネスによってアクセスコードが変わっている。

「止めて下さいマスター！駄目です。マス…」

…悪いな。

大丈夫。お前の記憶はそのままだ。ラピスがお前を忘れる事は無い。

彫像の様に固まったラムダを見る。

程なくして俺の意識は現実に戻された。

「…さあ、始めるか」

迷いが無いかと言われれば分からない。だが、これがラピスの為になるかと言われれば肯定する。

アカツキ達は許さないだろうがな…

「ゆめ…」

これは夢。そう理解できる程に、何度もこの夢を見ている。暗闇の中で待っている。その時が来るのを。

私はラピス。ラピス・ラズリ。

初めて髪を撫でて、初めて名前をくれた人を待つ。

一緒に立って、一緒に座って、何時でも一緒に居たい。

テンカワ・アキト…テンカワ…テンカワ…テンカワ・アキト…

アキト、アキト、アキト、アキト。

私はアキトの目。アキトの耳、アキトの手、アキトの足。私はアキトの…

「いや、それは違う」

「アキト？」

…何で？何時もなら嬉しいアキト。でも、今日は何か違う。何時ものアキトじゃない。

「ラピス。お前はお前の物。俺の物なんかじゃ無い」

「どうしたのアキト？」

アキトの心が解らない。何だろうこの感覚？

「俺はお前に慕われるような奴じゃ無い。逆に憎まれるべきなんだ」
「にくむ？」

憎む…違う。私はアキトが好き。

「俺は復讐者だ。そして強奪者でもある…自分の都合で色々な物を奪った…お前の未来もその一つだ」

「うばう？」

奪う…違う。私はアキトに一杯貰った。

「ラピス…今まで有難う。本当に感謝・自責・している」

感謝？それは私の方。アキトに私は感謝してる。

「ナノマシンによる共感…ラピスには負担を掛けたな。だが、それも今日までだ」

「アキト？」

怖い…そうだ。怖い。何時もアキトが守ってくれた。これが怖い。

「さあ…眠るんだラピス。起きれば自由になっている」

「アキト……」

背中に寒気を感じながら意識が途切れる。アキト……アキト、アキト、アキト。忘れない。あの時私は生まれた。アキトが私を生んでくれた。

……

どのくらい時間が経ったんだろう。

体内でナノマシンが活動している。目は開かない…けど分かる。アキト？リンクを通じてアキトが流れ込んでる。

「彼かい？テンカワく——誰だいそれ？それよりも、今日は何が食べたいんだい？」

アキト。

「名前か、そうだな…ラピス…ラピス・ラズリって言うのはど——修正——ラピス・ラズリ。貴女はラピス・ラズリよ」

ラピス…私はラピス・ラズリ。あれ…？

「貴女は とナノマシンで彼と——封」

私は……

「この二年、良く頑張ったね。これで君も学校に通うことが出来るよ。まあ軍学校だけだね」

アキト——…ナから名前を貰って二年……私は勉強してた。勉強…勉強………何を？

「また、何をしたんですかマスター——修正——マスターラピス？今日は精密性に欠けてますよ？もう少しで軍のオペレーター科に行かれるのですから、もう少し緊張感を持つて…」

そう船。私はラムダと一緒にオペレーターの——何故？

「すまないね…君に罪は無いんだ。でも、君は選ばないといけない所…彼——修正——君はMCだ。君の能力は僕たちが及ばない所

にある。だから、君が安全である事を証明しないといけないんだ。だから船に乗って——オペレーターの経験を積んで貰いたい。きつと彼——女もそれを……」

意識が白む。なんだったんだろ…大事な大事な何か欠けている。そう言われているように感じる。

考えていたらナノマシンが落ち着いた……声が聞こえる。誰？そこにいるのは誰？

「名前を覚えてくれるか？」

私はラピス・ラズリ。エリナがそう言った。

「エリナというのは誰だ」

エリナ、は、私に名前をくれた人。

笑顔のエリナが浮かぶ。イヌの耳を持って笑ってる……喜んでくれるの？なら良い。

「何のために船に乗った？」

オペレーターの勉強の為。そうしたら皆が喜ぶ…アカツキがそう言った。

私をもっと上手くなれば、もっと楽になるって言った。だから頑張った。

「アカツキってというのは誰だ」

ネルガルの会長。私はネルガルの研究所で生まれた。そして…
- 修 - - エリナに引き取られた。

「ラムダは君の何だ」

ラムダは友達。二人で一緒に手伝うって約——一緒に勉強した。

「これから君はどうする？」

学校で勉強する。その為に勉強した。

何を学ぶんだろう。ナノマシンの操作？艦戦訓練？

「ああ………すまない。さよならだ - ラピス - 」

！！

なんだろう……胸が痛い。痛い痛い痛い痛い。チクチクする。嫌。聞きたく無い。さよならは聞きたく無い——封…効かない！
？——

「貴女が一番好きなのは誰ですか？ラピス」

!!

黒髪……顔を黒い物で覆った全身真っ黒な人が目蓋に浮かぶ。
あれは誰？

「ラピス。貴女の側に居たのは誰？居て欲しい時に真っ先に来たのは誰？」

頭が痛い…胸がチクチクするよ………ト…

真っ黒な人の口元が歪む。笑ってない…けど違う。なんだろう

……

「ラピスは困ってたんだ」

そうだ。困った…嫌じゃないけど……あれ？——修…何故効かない！——うん。——トは困ってた？

「忘れちゃっていいのかい？彼はそれを望んでる…君が彼の為に何でもするんなら、君は彼を忘れないと駄目なんじゃないかな？でも……忘れちゃいけないよ。君が彼を必要とするなら、君は彼に何をしてあげる？考えるんだ。君が求める未来を、彼に言えば良い…勝手に決めるんじゃない、馬鹿野郎！——ってね」

私は——トの………私は、ア——に…

見上げた——は泣いていた。知っている。

あれは何時？初めて戦艦を落とした時だ。

——は心で泣いていた。見たくない。

——の心が私の胸を叩くから。ごめん。ごめんね。

守るから、私が護るから。私は、

「アキト」

「くっ」

目が開いた。

……少し驚いた。

眼前にアキトの顔があつた。何時も付けてる、視覚補助を付けてないアキトの素顔が見える。表情が暗い。リンクを通したアキトの侵入が止まつてる。

「アキト？」

『……ラピス。今からでも遅くない。俺を忘れるんだ』

「アキト？」

『……………ラピス』

「私はアキトに必要ない？私は不要？要らないの？」

流れるように声が出てきた。聞きたいこと。問いたいこと。一杯

一杯…アキトは私が要らないの？

「そんな事ない。俺はラピスに助けられた」

「私はアキトと一緒に居たい。嫌わないで、アキト……アキト。行かないで…おね…が、い。わたしをおい、て…かない、で」

視界が歪む。アキトの顔がボヤけて見える。目が熱い…なんだろう…雨が降ってるの？頬に水が流れているよ？

「ごめんな…ラピス……………ごめん」

頬にアキトの暖かい手が触れた。胸がスツと軽くなる。アキトは私を守ってくれた。アキトが私を……私はアキトに……………

「アキト」

アキトに抱きつく。腕の感覚はしないけど、アキトの匂いに包まれて私は意識を失った。

- -

目が覚めた。隣を見ると、静かな寝息を立てているラピスがいる。目尻には涙が微かに残っていた。

俺はラピスを泣かせてしまった。今後笑って貰うためにやった事でラピスを傷つけた。

覚悟していた事なのに、胸に残ったのは例えようの無い嫌悪感だけだ。失敗した上に泣かせては、何のためにしたのか分からない。

「気が済んだかい？」

「何故邪魔をした…アカツキ」

ベッドから降りる。入口を出て通路に出ると、アカツキが腕を組んで待っていた。

船の動力は完全に落としていた筈だ。俺じゃなければ、アカツキ

じやないと船の動力は動かせない。

動力が戻れば、停止させていたラムダが起きる…最後に俺の干渉を邪魔をしたのもラムダの筈だ。アカツキのIFSにそれをするだけの機能はないからな。

「外道になりかけた気分はどうだい？」

「なに？」

確かに強引な手だったかも知れない。だが、それは！

・ドスツ・

グッ！

気がつけば、アカツキの拳が脇腹に突き刺さっていた。避けそうと思えば避けただろう。だが、何故か体が動かなかった。

「解って無いね？こんな馬鹿な事をしたくらいだ。考えもしなかったのかい？……今の君は奴等と同じさ。他人の意思を踏みにじった下衆野郎さ！」

「違う！俺はラピスの為に…ラピスを想ってした事だ！」

今度は左の拳が飛んできたが、当たる寸前で掴み止めた。

「違わないね！君は只逃げたかっただけさ。ユリカ君から！ルリ君から！ラピス君から！」

拳が蹴りが乱舞する。ネルガルの会長とはいえ、以前は前線でエースを張った腕だ。腕前は錆び付いているが、それでも気迫は以前より上だ。

少しずつ押されている。反撃しようにも体が上手く動かない。

何故だ？くそっ…くそっ……………くそ！！

「言えないかい？言えないだろうね！一緒に居ると心が痛いって！消えてしまう程に苦しいってさ！」

「うるさい！！」

加減無しの拳が飛ぶ。

常人を越えた筋力から繰り出された拳が吸い込まれるようにアカツキに当たる。

「効かない…ね！」

「なにっ！」

アカツキが不適に笑う。

何故だ…

どんな種があるのか。肋骨を折れるくらい力が入ってた筈だ。

「今の君には負けないよ！」

アカツキの動きは悪くない。だが、その程度だ。ここ数年、地獄を見てきた俺には遠く及ばない。なのに…

どうして負ける？

結果は予想できている。あと三分もすれば俺は体が動かなくなつて負ける。恐らくラピスとのリンクに障害が発生している。

重心がズれる。正面を狙った蹴りは弾かれ、逆に地面に叩きつけられる。

起き上がったところで蹴りを喰う。

「…負けられないよ。被害者が加害者に成るなんて良く有ることさ。ただどね！君はエゴでもなく、自分の逃げのために手段・彼等・を正当化している。其処を赦したら二度と助けられない。馬鹿をやリかけた馬鹿にはお仕置きが必要なんだよ！」

「アカツキイイ！！」

「おおおおお！！！」

膝が折れる。

立っていられなかった。意識はハッキリしていたが、アカツキの顔がまともに見えなかった。気配すら分からなくなったところで、俺は…意識を手放した。

第06話（前書き）

書き方を色々試してみたりしていると時間がかかりますね

第06話

「終わったの？」

「……いいや。まださ」

床に倒れ伏した男を、通路を歩いて来た女は見つめる。物腰や立ち振る舞いは秘書のようだ。

「まだやるきなの!？」

少し怒ったような言葉に、肩まで髪を伸ばしたロン毛は言った。

「君も落ち着きなよ。彼には責任を取って貰わないと終わらないよ。簡単に終わらせもしないけどね」

「そ、そうね」

秘書は手櫛で髪を直す。

言われて気付いていた。自分が冷静じゃないと。近しい人間が起こした暴挙に動揺していた。

信じられないわ。そう、秘書は報告を受けた際に漏らしている。

先程会っていた男は、あの子を愛していた。男女の愛ではないが、愛しいと感じていた筈だ。それなのにそんな馬鹿な真似はする筈がない。そう思っていたのだ。

「どうして……」

「それだけ大きかったって事だろうね……復讐ってやつがさ」

常人じゃ扱えない機体に取り、常人じゃ耐えられない地獄を見た。手にした幸せを壊され、無惨に散った未来。自棄を起こすことは自然な流れだ。

「哀しいわね……」

「マスター!」

高い声を上げて走って来たのは銀髪の女性。鉄製の床を鳴らしながら走ってきた女性は、床に倒れた男のところで止まった。

「……ねえ？彼女？」

「……うん。僕のトコに連絡してきたのは彼女だよ」

秘書の問いにロン毛が頷く。

二人は就寝中だったが、緊急連絡用のアクセスコードが使われて叩き起こされた。最初は顔がシークレットだったが、ロン毛は顔も見せない相手は信じられないと言ってシークレットを解かせた。

「さて……まあ今の行動で何となく予想はついたけど………君は誰だい？船の動力を起動させたら出てきたけど？」

「マスター！大丈夫ですか？直ぐに医務室に！！」

ロン毛の声は、女性には届いていないようだ。バツタと呼ばれる機械を呼んでいる。

「…大きいわね」

「そうだね」

言いながら秘書は銀髪の一部を睨む。ロン毛も同意するが、目は笑っていないかった。

「マスター………あ……」

銀髪は男の回りを歩き回る。だがバツタが男を背に乗せようとしたりとところで、女性は何かに気付いたように自身の両手を胸の前で見つめた。

手をグツと握りしめると、今度は男を背中から抱きしめてお姫様抱っこにした。

「ちよつと何を」

慌てて秘書が銀髪を止めに入るが、立ち止まることなく去っていった。

「……まだ、終わって無いのかい……」

銀髪を追って走って行った秘書を見つめ、二人を追うロン毛は呟いた。

- -

「はい……」

「やっぱりか」

「信じられないわ……」

「……アカツキ……か？」

「っ、マスター」

「え？」

「……誰だ？」

どこかで見たことがある女性と、エリナが近寄ってくる。

視界が悪い……ラピスは居ないみたいだな。

医務室……か？

何度も世話になったベッドの感触から予想する。

「起きたかい？」

アカツキか。

「……ああ。寝起きはいいんでな」

「そりゃ良かった」

軽口は軽口で反ってきた。

「何でこんな事したの！」

「エリナか。俺が出来る最後の償いを」

「パンッ」

頬に平手が当たった。痛みや感触は薄いが、目の前にある顔が胸を責めた。

「ふざけないで！！貴方、自分が何をしようとしたか分かってるの！？」

「……」

分かっている……そう言える筈だった。だが、何故か言えなかった。

「君の負けだよ」

「………そう、みたいだな」

アカツキか……そう言えばさっきアカツキに負けたんだっただな。今考えても不思議でならない。

力も技術も俺が勝っている。いくら体力が十分じゃ無かったとは言え、それだけで負ける程甘くは無い。アイツの意識を刈り取れるだけの一撃は入れた筈だった。

それなのに負けた。その事実だけが今残っている。

「俺はどう…」

「昨日も言っただよ…他人に聞くな自分に聞けってさ」

……… 敵しい奴だな。

甘えるな。そんなの自分で考えやがれ…か。

「……… ラピスと話を…してみる」

「マスター………」

ん？

「誰だ？」

しまったな。そういえば、もう一人居たんだっただよ…アカツキ、エリナ以外か。プロスペクターやゴートじゃないな。誰だ………

「…お手を失礼します」

誰かに手を握られた。

- キー -

視界が開ける。目に写ったのは綺麗な銀色の髪をした女性。

最近…っと言うか、さっき会ったばかりの女がいた。

「どうですかマスター……… ラピスの様にはいきませんが、少しは五感が働きましたか？」

「ああ… 良く見える。大したもんだな… ラムダ」

「有難う御座いますマスター」

………

「アカツキ」

「言っどくけど僕関係ないよ。勿論ネルガルもね」

そんな訳があるか。ラムダはずっと俺たちといた。こんな事がネルガル以外に出来るわけが…

「マ、マスター…!？」

髪や顔を触ってみるが本物だ。いや、偽物には思えない。

「アキトくん…!」

「何だエリナ」

「貴方ね…今はそんなことしてる時じゃないでしょ!」

何を言っど…

「マ、マスター……駄目です。もっと優しくして下さい……触れられる感覚に慣れてないので、その……」

……嘘だろ。

「本当にラムダなのか？」

「はい。マスター」

もう一度ラムダを見る。

ラムダにアクセスをした時に見た姿だ。それは間違いない。

「話せ。もうさっきみたいな言い訳は効かんぞ」

「……はい」

「おや？やつと本題かい？もう少しイチャイチャしててもいいんだよ？」

「……そ、そんな。私はマスターと、あ、あの……その……はう」

「会長？秘書課の美月さんの件ですが」

「あ、何でもない。続けて続けて……」

話の腰を折られた形だが、ラムダはこうなつた要因を語つた。

「……何故そんな事をした」

ラムダの話聞いて、俺は静かに自分の頭に血が上っていくのを感じた。

貨物船の運んでいたコンテナの一つ。ダミーの中に見つけた本命。その中に入っていたのがこの体だそうだ。

「それは……」

「解っているのか？それは奴等が運んでいた物だぞ！どんな為の物かも解らずにお前は……」

「……も、申し訳」

言葉に詰まる。火星の後継者で、こんな物を作るのは山崎ぐらিদらう。あの山崎が作ったなら、それがどんな目的で作られたのかは解らないが録な代物じゃ無いだろう。

「早く元に戻れ。それは破壊する」

「お願いですマスター。危険が無いかは隈無く調べました。私を捨てないで下さい……ッ……ッ……」

涙…だと？

あの下衆…泣き叫ぶ火星人を何人も殺しておいて…そんな機能を持たせたのか…ふざけるな！！

「お前、自分が何言ってるのか」

「それは君もだけどね」

…アカツキ。

「君の感情も分かるけどね。でも、僕としては先手が打てて幸運だと思っよ」

「そうね…まさか人工的な生体素体だなんて…」

「どういう事だ？」

珍しく真剣だなアカツキ。

「分からないかい？考えてみなよ。この成功が何を引き起こすかさ」

機械に人工知能が入った…ユーチャリスの方が凄いと思うがな。

「死なない兵隊…って聞いたこと無い？」

「……ゾンビとかか？」

「マスター！私は腐ってません。清潔です！」

「さっきのラムダの言った事を思い出してみなよ」

………触れられる感覚…感覚？

「触覚があるのか？」

「そう。ラムダの体は機械だとしても、感情も感覚もあるように見える。まるで…いや、人間そのものって事さ」

「これが量産されたら？いくらでも代えが効く兵器の完成さ。いくら君でも、数百のエステバリスに捨て身で特攻してきて自爆でもされたら？」

「ジャンプが使えなければ死ぬな」

機体に密着されれば、自爆されて間違いなく死ぬだろうな。

「そう。そんな戦法をされる前に発見出来て良かった。そういう意味さ」

「解析してみないと詳しいことは解らないけど、対策が立てられる

かも知れないし……」

……くそ。

「ラムダ、お前も同じ意見か？」

「私は……私は……体が欲しくなりました。マスターがラピスに触れる様に、私もマスターやラピスに触れたい。」

マスターの意に背くと解っていてやりました……何をされても構いません……お願いです。私にこの体を……下さい……お願いします」
それが……俺の、ラムダに対しての意識を変えさせられた瞬間だったかも知れない。

人らしく成長する命の無い生命。

人工知能を有した機械から、体を手に入れてそこに確かに存在すると……擬似生命体とも言える人らしい存在に。

「……お前にも借りがあったな……好きにしろ」

「本当ですかマスター！有難う御座います……！」

「お、おい」

ラムダが抱き着いてきた。一番長く付き合いがあるのは俺かラピス。恐らくそれが元になつてゐるんだろうが……お前がやったら……

「マスター私は幸せです」

……う……これじゃラピスの事を言えないぞ……

黙って頭を撫でてやる。しかし、同じ年くらいの女が頭を撫でられて喜ぶってどうなんだ？

「嬉しそうね……」

「なんだったら僕が」

何かアカツキが殴られてるように見えるのは気のせいだろう。あ。今日は本当に疲れた……寝ても、いいよな……

「マスター？」

微睡みながら意識を手放した。

「何だかんだ言って、結構溜まってたんだろうね」
「そうね……」

- -
静かだ。

こんなに静かな夜は何時以来だろう。

以前は何時ものように思い出していた過去の記憶。

楽しい事があった。悲しい事もあった。嬉しい事も…そして、それらは全て崩れて消えていった。

許されない事をした。それが過去自らが許せないと言い切った事であることは十分に承知の上で。

- 復讐 -

俺は復讐がしたかった。

毎日が苦痛で毎日が恐怖で、毎日が地獄だった。

今日も一人居なくなつた。同じぐらいの年の人だった。俺の後に連れて来られ、俺と同じように五感に支障をきたしていた。

思い出したくもない…思い出せば恐怖で手が震えた。紅い…紅い目が俺を見ていた。

弱かった。自分という存在が許せなくなるくらいに。ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう…

壊れたかった。現実から逃げて逃避すれば…諦めれば楽だったのかも知れない。楽に…楽になりたかった。

俺の中で繋がっていた唯一の線は…もう二度と会えない、銀色の髪の毛の妹と言える子…その子によく似た、薄桃色の髪をしていた筈の少女の存在。

金色に光る瞳が俺を見ていた。色を失って久しいけれど、あの子に会い話をした時間は恐怖を忘れることの出来た唯一の時間。

明日が来るのが怖かった。何時とも知れない死が近づいてくるように感じたから。

意識がぶれる。思考が出来なくなっていく。

こんな幕引きが俺の最後…もしかさ がある ら せめて

あ の だ け た -

…俺は今無力な自分を殺した。殺したと思っていたんだ。けどそれは幻想で、今の俺の気持ちすら殺せない。酷い事だって分かっていたのに、俺は実行した。

……………。

「アキト」

何度も聞いた少し重さを感じさせる少女の声が聞こえた。

「…ラピス」

「うん」

静かな沈黙が流れる。

「アキト」

「…ん」

背中が引つ張られる感触。

「俺はな。ラピス…お前が傍にいてくれて良かったと思っている。けどな。同時に痛かった」

ラピスは何も言わない。

「お前はそう思わないだろうが、お前が普通と感じている俺と一緒にいる事は普通じゃない。戦艦を使って殺し合いなんてお前ぐらいの子供はしない」

自分の声が無機質に感じる。

「それなのに、俺はお前に力を貸してもらって戦った。殺して殺して…何人もこの手で殺した」

血に染まった両手を夢見て目を覚ますことなんて日常茶飯事だった。

「後悔はしていない。俺がそう望んだから…だけど、その判断もつかないお前にも手を汚させた。それが俺には…耐え…いや嘘だな

俺は 逃げたかった」

そうだ。そんなの嘘だ。あいつの言った通り、俺は

「もう全てを終わらせて、一人で消えてしまいたかった」

吐き出した。ラピスの理解できるかは知らない。気がついたら俺は…また、逃げていた。

自分の半分くらいしか生きていない子供に吐露した弱音。自分がまた嫌いになる。

「…嫌。一人は嫌だよ」

背中から引かれる力が強くなる。

「そうか」

言葉は続かなかった。

背中にもたれかかった重さが許さなかった。

「俺に残された時間…お前の為に使う」
そう言つて　　- 夢 -　　は覚めた。

第07話（前書き）

時間空いちゃいましたね。

携帯で書いてメールで送ると、どうしても改行がし辛いのが…

第07話

ん…

意識が覚醒する。気だるさを感じつつ、今日のこれからを考える
とまた寝たくなり目を閉じた。

「お…おふぁよう御座いますマスター」

「ああ。お早うラムダ」

現実はその甘くないようだ。ゆっくりと目を開ける…

…身体が重い。まだ完全じゃないか。

「あ、あのマスター！」

「何だ」

「ええと　まずは伝言があります。昨日のお二人が今日の昼にま
た来るそうです」

アカツキとエリナか…これからの話を話すつもりか。

俺が生きていると様々な所で支障が出る…昨日が終わっていれば、
命尽きるまで戦うつもりだったが…それはもう出来ない。

「マスター？」

「ああ…なんでもない。ラピスは…」

起きていた。ベッドから立ち上がろうと横を向いたら視線が合っ
た。

「…」

「お早うラピス」

「おはよ、うアキト」

いつから起きていたんだろうか。ラピスは両手で袖を掴んでいた。

「お早う御座いますラピス」

「………」

袖が引かれた。ああそうか。

「大丈夫だラピス。コレはラムダだ」

「これって！マスター！」

ラムダが非難の声を上げるが問題ない。

「…ラムダちが、う」

気に入らなかつたみたいだ。

『本当ですよラピス。ほら』

ラピスの手首につけられたコミュニケーションから電子音が鳴り、手首からナノマシンを伝わる光の奔流が走る。

「……アキト」

ん？

視界が鮮明になる。ラムダの補助から、ラピスへとナノマシンによる補助が切り替わったようだ。

いつも通りの視界に、いつも通りの体の感触。

腰を起こしてラピスを引いてベットから立ち上がる。

「あ、マスターこれを」

手に持った黒いマントを渡してくる。

「ああ。悪いな」

受け取ろうと手を伸ばしたら反対側に引っ張られた。

「ラピス？」

「だめ…アキトからでてっ、て」

？

「ちょっと待って下さいラピス。完全に離れてしまうと、緊急時にマスターを補助できなくなってしまうです」

「だめ」

…これはリンクシステムの事を言っているのか？

「ラピス。今後の負担も考えるとラムダとのリンクは残しておいた方が…」

「嫌！私がアキトの！」

見上げてくるラピスの目はどこか悲しげだ。これはだめだな。

「ラムダ。一度システムを切れ。イネスもまだ完成したとは言っていない。なかつただろう」

「分かりました

失敗しました。やっぱり性急過ぎましたか

…」

何か小さく言っているが聞こえない。ラピスの表情が元に戻ったからシステムは切ったみたいだが。

「…ラピス」

「？」

頭を撫でる。

「昨日俺はお前に酷い事をした。覚えてるか」

「うっん」

首を横に振る。夢…と思っているんだろうな。

「そうか…俺はなラピス…俺は、ラピスをエリナに預けて消えるつもりだった」

「っ」

指でラピスの口を塞ぐ。

軽く。ほんの少し触る程度に指をおく。

「でも、怒られた。悪い事をしようとしたから、ラムダやアカツキやエリナに怒られたんだ」

膝を折る。視線をラピスに合わせてバイザーを取る。

「今までラピスには助けられた。これからは自由に生きて欲しかった…でもそれは俺の考えだ。ラピス。ラピスはこれからどうしたい？」

「わたしはアキトとい、る」

「…分かった。約束をしようラピス」

「やくそく？」

「ああ。これから1年…俺はラピスと一緒にいる。そして、1年が経ったらラピスの夢を覚えてくれ」

「ゆ、め？」

「そうだ。自分の叶えたい夢を覚えてくれ。勿論俺と一緒にいたい…じゃ駄目だ。ちゃんと自分がやってみたい事を覚えてくれ。もし出来なかったら、次の1年はエリナと暮らすんだ」

答えられても答えられなくても同じ事…酷い約束だが、譲れない。

「…」

「いいな。約束だラピス」

右手をラピスに向ける。指きりなんて何時以来だ。

「同じように手を出して」

はてな顔で小さな右手を出してくる。

小指を絡める。

「子供の頃は、忘れちゃいけない約束をする時にはこうするんだ」

「やくそく」

「ああ。約束だ」

バイザーをつける。昨日のおかげで随分と調子が狂っている。自分でも何をやっているのか分からない。

「あの…マスター？ラピス？私もいるのですが」

「分かっている。これからも頼むぞラムダ」

「気のせいでしょうか…私の扱いが酷いような」

気のせいだ。

「きのせ、い」

少しの間ラムダがいじけていたが、ラピスのお腹すいたの言葉に部屋を出て行った俺たちを慌てて追いかけてきた。

「うつつ。これが今の私…データ…とラピスの差ですね。いいです

！私だって、これからはマスターとの記録を作っていきますから！

「！」

- -

「おやようラピスくん。お邪魔してるよ…第二の大関くん」

「お早うラピス。早かったわね…朴念仁」

休憩所の扉を開くとコーヒーを片手にパンを持つアカツキと、紅茶？を持ったエリナが椅子に座っていた。

「おはよ、う」

「…ラムダ、ラピスの食事を出してくれ」

「はい。マスターは…ですよね」

出してきたのは栄養固形物…水とコレがあれば俺はいい。

最初はラピスも同じものを食べようとしていたが、色々話し合った結果、ちゃんとした食事を摂るようになった。

アカツキとエリナの対面につき、息をつく。ラピスは子供用の椅子で俺の隣に座った。

「…これから1年ラピスと暮らす。悪いが協力してくれないか」

バイザーを取って二人に頭を下げる。

俺1人の力でこれから1年…平和に暮らすのは無理だ。

それに、火星の後継者の残党狩りは行う…これは譲れない。ただ、それは俺1人でやりたかった。

少なくともユーチャリスを使った攻撃は今後は控える。サレナ1機で削る作業が主な行動だ。

誰かのサポートがなければ動けない体だが、ラムダが俺のサポ―

トにつけるなら…

「…ふん。少しは頭のしこりが取れたみたいだね」

「誰かさんのお陰でな」

「…ちゃんと反省しているのね」

反省…か。反省では済まないだろうが。

「後悔…はしていないが、許されない事だとは思っている」

「はあ…女の子を無理やりなんてゲ　な事を反省していないってわけね」

…ラピスがいるから余り酷い言葉を使いたくないのか。もしラピスが居なかったら、レイプ魔だのなんだの言われていた気がするな…

「これからの事を考えると、俺から離れた方が良いと思うからな…それで、ネルガルはどうする？俺を売るのか」

だったらここに二人だけで来ることはないだろうがな。だが、もしも援助が受けられないのなら別の道を模索しないといけない。

「君には死んでもらう」

アカツキが全てを言い終わる前にラピスの耳を塞いで離す。

「！」

ラムダがビクツとユーチャリスを操作しようとしていたが、アカツキは静かにコミュニケーションを触るとラムダが悔しそうな声を上げた。動力が落ちていたら船はなにも出来ない。ラムダが別に何かをしようとしていたが、それを止めさせる。

「君は驚かないんだね」

「一度はお前に救われた命だからな。目的さえ遂げられたら好きにして構わない……」と昨日までなら思っていた」

「今は違うのかい？」

「ああ……今はラピスの為に生きると約束……したからな」

言い終わると、聞こえたのかラピスが小指を俺に向けてきた。

「ハッ……いい。いいね　っグエ！」

腹を抱えて笑うアカツキにエリナが肘を入れていた。

「正確には、アナタにはテンカワアキトの名前を捨ててもらっわ」

「それでは済まないだろう」

ラムダが胸を撫で下ろすのが見える。

「勿論。此方がいくら口で言っても、テンカワアキトを引き渡さないとどうにもならないわ。だから、一度アナタを売ったという事実が欲しいの」

「……どうするつもりだ？」

「それなんだけどね……」

アカツキが視線を下げる。見ているのはラピスだ。

ラピスは話をじつと聞いて何も喋らない。売った売らないの内容がまだ分かっていないのかも知れないな。

「ラムダ。ラピスの食事はまだか？」

「は、はい」

キンツと音がなつて出てくるレトルトの食事。皿に盛り付けられた食事をラムダが持ってくる。

「ラピス」

「いただきます、す」

今日はスパゲティのようだな。

「じゃあ俺は向こうで好きにしていんだな？」

一度捕まって、逃げればいいんだ。CCを隠し持っておけばいい。体内にでも仕込めばそうそう取り出される事もない。

「ああ。本当なら、君がサレナで戦って死んだように偽装したい所だけどそれだと、ラピスくん…僕らが君に加勢した事になるかも知れない」

…なるほど。

「俺の事はどこまで軍に知られているんだ？」

「この間のクーデターの時に捕まった中に山崎も居た。僕が知っているだけでも、君達に非人道的実験をした事もその結果も彼らに渡っている可能性が高い」

拳に力が籠る。

「その記録の公開は…されないんだろうな」

「…ええ。今のところ、軍から流れてきたデータをイネスが解析していたけれど…誘拐の協力者に軍関係者もいたようなの」

エリナが顔をしかめて顔を下げる。ああ…映像データでも見たのかもな。あれは酷い…からな。

「それで闇…か。同じだな。それで俺が消えれば、今回のコロニー襲撃の件も目出度く解決というわけだ」

内心落胆している自分に、まだ俺は甘いことを考えているのかと罵倒したくなる。

軍全体の信用と、1人の犯罪者と既に犠牲になった人の命。天秤にかけるまでもない。使えるのなら使う。使えないのなら切り捨てる。

それが当然なんだろうな。

「分かった。俺のサポートをラムダに一度切り替えるんだな？」

「…駄目！！」

予想通り、ラピスが食べるのを止めて俺を掴んできた。

「あのねラピス…アキトくんは」

「駄目！」

「約束しただろラピス。俺はこれから1年間一緒にいる。だが、何時も一緒にいれるわけじゃない。イネスの定期健診の時も1日会えない時もあつただろ？それと同じだ。必ず次の日には帰ってくる」

「嫌」

じつと見上げてくる視線は無機質な瞳から悲しげな色に変わっていた。今までこんなに頑なに拒否の姿勢を変えないラピスは初めて見るかも知れない。

「なるほどね…」

アカツキが言って髪を梳く。

「なにがだ」

「君を取られたくないのさ」

「なに？」

「ラムダ…くん君とのリンクを取られたくないってことさ。いいことじゃないか。支配欲…は違うか。独占欲が出てきたのさ」

…欲か。

考えてみればラピスはまだ子供だ。俺とのコミュニケーションもリンクを頼っている部分も多い。

今日の朝、ラムダとのリンクを嫌がったのもそのせいなのか？

「そうなのか？ラピス」

「…アキトは私が助ける。私がアキトの」

目…手…足…

「そうだな。俺はラピスに助けられてばかりだ」

ラピスの視線が期待に変わる。だが、

「でも、今回はラムダに少し変わってくれ。完全にじゃない…ラピスとのリンクは切らない約束する」

「…」

「これは一緒にいる為に必要な事なんだ。1日くらい我慢できるな？」

ラピスは返事をしなかったが頭を撫でて説得するが、ラピスの表

情は変わらない。

「ラピスが我慢しないと、アカツキやエリナが困ったことになるんだ。分かるな？」

ラピスは何も言わなかった。だが、掴んできた腕は放した。

分かったとは思えないないが、少なくとも理解はした筈だ。リンクを通した説得は口で言うよりもダイレクトに伝わる。

余りしたくない行為だが、そうでもしないとラピスはリンクの主導権をラムダには渡さないだろう。

優しく頭を撫で続けるラピスからは、とめどなく不安の感情が流れ込んでくる。

その不安が少しでも軽くなるように、俺もリンクを通して大丈夫と受け止めていた。

第08話（前書き）

やっとPCの前に座れました（汗
構成は出来ているのですが、書く時間がなかったのだからちょっと差し
替えてグダグダ感が…

第08話

「マスター」

…どうしたものか。

自室の扉の前で、佇みながら考えてみる。

あの後、アカツキたちと話を進めているとラピスが部屋に戻っていった。

そつとしておこうと、何も言わなかったのがいけなかったのか昨日からラピスが部屋から出てこない。

今もリンクからは何も感じない。昨日からずっと閉じたままになってしまった。

「マスター」

やっぱりまだ子供なんだ…ろうな。

今までは納得したくない事はずつと俺の傍に居て我慢していたが、今回は俺の傍に居られない我慢…

無理に扉を開けても解決しない。でもそのままにしても…な。

数日後、ラピスとのリンクを一度切らないといけない。約束を守るためにも必要な事だ。

隠れて過ごすのならば問題もない。だが、それじゃあラピスに普通の生活をさせてやれない。

普通といっても学校に行かせたり、所定の棲みかを作ることもあるまいだろう。

だが…それでも追われ続けるよりもましな筈だ。

「マスター!!」

腕が引かれる。

ん？

…ああ。ラムダか。

「どうした？」

「どうした？じゃありません！いつまでそうやっているおつもりですか！？マスターはこれからやるのが一杯あるですよ？」

頬を赤くして怒るなんて…芸が細かいな。

感情の浮き沈みを、表情や仕草で表現するのは人間らしいといえ
ば人間らしいが…

考えてみれば、こいつの体に関しては何も分かっていないんだよ
な。

俺とリンクできたって事は、ナノマシンの処理はされている筈だ。
見た目は人間にしか見えない。

でも機械だ。

ナノマシンの処理も恐らくMCに近い操作が出来る。

でも機械の筈だ。

涙を流す事も出来て、声も声帯を通したような…機械質な音には
聞こえない。

でも…機械だろう？

ってこんな事を考えていても無駄だな。

「…そうだな。ラピスのことを任せてもいいかラムダ。アカツキの
ところに行ってくる」

「分かりました。お任せ下さい」

笑顔で頭を下げるラムダに、頼むと言ってコミュニケを起動する。

「アカツキ…ん？ああ……分かった。今から行く」

3コール以内に出るのは暇なのか…それとも気をつけているのか？
着信したアカツキと、少し話して行く場所が決まった。

「行つてらっしゃいませマスター」

「ああ」

ラピスの事が少し気がかりだったが、ラムダに任せれば問題もな
いだろう。

- -

コンコン。

無機質な音を立てて部屋のドアがノックされる。

静寂とも言える静けさを漂わせて、窓の外を見上げて雲を見る。

雲と雲の垣間見える青い空が今は空しく思える。

「入りましたえ」

シュツと音を立ててドアがスライドする。

軽めの音を響かせる足音は子供のそれとを感じる。

自分が呼び出したのだ。入ってきた人物に心当たりはある。

だが、今は後ろを振り向かず空を見上げたまま……後ろ手に手を組む。

様式美は大事なのだよ。

「お呼びでしょうか」

「うむ。待っていたよ」

澄んだ声が部屋に響く。この声を聞くと少し感慨深くなる。あの頃を思い出す……いや、今では少し違うな。

「それで話とはなんでしょうか？」

「……時に、おじいちゃまと呼んではくれないのかね？」

「……あの」

何度目になるか分からない問答を繰り返す。根負けして今度から呼んでくれるのならば、二つ返事で何でもする自身が出てくる。

「今日呼んだのは次の命令を与える事。そして、伝えないといけない事がある」

「……はい」

「うむ……まず、今回の件ご苦労だった。君たちの働きによって犠牲を最小限に抑えて鎮圧することが出来た」

人の噂も七十五日。クーデターが鎮圧されて既に日は経っている。今ではそんなことがあったのかと、テレビやニュースで話題に上ることも少なくなってきた。あの事件の裏で行われていた行為についても公表されることはない。

後ろに佇む一人には以前から、その件で報告を受けている。

自分の能力を使って、ある実験についての証拠を集めその結果を

立証する為に…その報告を受けるたびに胸の奥で痛みが走る。

彼女自身。その行為にどれだけの意味があるのか分かっているだろう。彼女は聡明で理解力もある。

だが、諦められない。凜として落ち着いた雰囲気を出しているが、彼女は芯を揺り動かされれば熱を持つことは明らかだ。

「明日より君たちには、コロニーを巡って火星の後継者の捜査と逮捕を頼みたい」

「はい」

声に少し嬉しさを感じる。やはり考え直した方が良かったかも知れない。

彼女の脳裏には、あの青年…彼の姿が写っているに違いない。

「加えてコロニー襲撃犯の捜索も同時に行ってもらうことになった」
「司令」

「…現状で、コロニー襲撃と火星の後継者は接点が見つかっていない。あの黒いエステバリスのパイロットは最重要参考人…として捜索されることになった」

本音で言えば、コロニー襲撃時の映像記録は残っていない。実際にコロニーを爆破したのが、あのエステバリスなのかは不明だ。しかし、そんなものは関係ない。今のままだといずれそれも作られる。そう、作られるのだ。

「…以上だ」

「はい…」

さつきと違って力のない返事。それが迷いを誘う。言っべきか…
言わないほうが良いのか…

「それとユリカのことなのだが」

「それは私が説明しましょう」

こちらの声をさえぎって、テレビのディスプレイが付き声が響く。
「…さん」

「少し疲れているから詳細は後でレポートするわね。結論から言うと、彼女は大丈夫。ちゃんと安静にして療養すれば回復するわ」

「そ、そうか！」

その言葉に安堵する。

彼女は遺跡施設の第一人者とも言える。

無理を言っただけに来てもらった。そのためにいくつかのカードを切ったが、それで少しでも安心が買えるなら安いものだ。

「本当ですか？」

「ええ。彼女はずっと夢を見ていた気分と言っていたけど一種のコールドスリープ状態だったのかも知れないわね。生体部品として組み込まれてはいたけど、遺跡とリンクさせる為の大事なユニットとして無茶はされてなかったみたい」

言葉に少し棘を感じるが、気のせいと思おう。

「ユリカはどうしている？」

「今は寝ているわ。さっきまで、夢つつつそのまま質問に答えていたらそのまま眠ってしまったわ」

「あの…ユリカさんは…」

「…あの子、覚えていなかったわ」

感情を感じさせない冷え切った言葉だった。

「そうですか」

私としてはその言葉に少し安心を覚えてしまった。

「恐らく、拉致されて直ぐに遺跡に組み込まれるために眠らされていたのでしょうね。記憶を残してしまうと、実験に支障が出るかもしれないと考えたのかもね」

「あの…無事、でしょうか？」

ユリカが無事なのは聞いた。その後の、この質問。恐らくは彼のことを言っているのだろう。

彼には同情はする。夢を諦め、今では…

あの事件後の調査で分かった様々な事。その中にあった人体実験の名簿。

その実験内容…

「ええ。今は安定しているわ」

交わされる言葉の節々に違和感を与えながら、やり取りが行われている。

…果たして私がしていることは正しいのか。
彼の事は葬られた。
終わったこととして。

-

「おっせえぞアキト！」

「待たせたセイヤさん」

まったく、コイツはいつもマイペースだよな。

「せっかくこの俺様が来てんだ。エステちゃんのご機嫌を見ながら新発明をしたい！！っていうのを抑えて、色々やってんだからよ」

「ああ。感謝する」

アカツキの野郎に呼び出されて来てみれば、またコイツら無茶しやがる。

しかも、アキトの出頭が決まる前に呼び出しやがって…用意周到じゃあねえか。

口の端が上がるのが分かる。

アイツじゃねえが、燃えてくる…あん時に戻ったみたいだぜ

「でもよ。本当にやんのか？下手したら…」

「セイヤさんの腕は信用している」

「一言余計だ。は、て何だ。は、て」

スパナでアキトを指す。

俺の後ろにはブラックサレナがおかれている。

ここ数週間の戦闘で、ラムダが整備と点検をしていたみたいだが実際にバラしてみると結構、結構部品に負荷がかかっていた。

こんな無茶なスペック…本当なら作るつもりはなかった。

アキトの野郎の本気を思い知らされて、俺が求めた事にコイツは泣き言言わなかった。

「そうですね。また迷惑をかけます」

常人じゃ絶対にまともに乗ねえように仕上がったのに、こいつは乗りこなしやがったんだ。それに答えないと男が廃るってもんだろ？

「…いいけどよ。それが俺の仕事だからな。大いに任せよってな！」

ピーッ！

電子音が鳴ってサレナのハッチが開く。

やあっと降りてきやがった。

「いやあ…やっぱ駄目だね」

「だから言っただろ？慣れとかじゃねえんだよ」

ハッチからゆっくりと出てきたアカツキは、はしごを使って降りてきた。

顔色が悪そうだな。だから姿勢制御くらいは緩和しておけつつつたのによ。

「前も同じような事を言っていなかったか？」

「いいじゃないか。昔取った杵柄…と言ってもこれは駄目だね。

何度か反転すると姿勢制御がままならない…敵と敵の間を抜けるなんてよく出来るね」

髪についた汗を、ぬぐうようにかきあげやる。

「俺だって、ラピスやサレナの補助がなければ正確な動きは難しい。最初は何度も死に掛けただろ」

「そうだったね…あ、軍の方に行っているイネス君から連絡があったよ。無事だったさ艦長」

「そうか」

「そうかって、そんだけかよ？やっと助けられたんだからよあ」

「前にも俺の考えは言ったはずですよ。俺は復讐の為…そしてアイツを守れなかった自分との約束の為に闘う。罪を背負った俺に、あの頃に戻る権利はないですから」

コイツが生きてるって聞いて、何度皆に言おうか。ルリ坊に伝えてやろうかと思ったか分からない。

それを止めていたのは、必死に死に急ぐコイツの姿を見ちまったから。俺は、死に行かせる為に技師になったんじゃねえって言った時に、コイツに言われた言葉を生涯忘れられないと思った。

あんなに好きだったコックの道を閉ざされて、あんだけおかしくなっちまった体で必死に震えていたのを見て何も言えやしなかった。「そうだったな」

でもよ。

やっとここまで、頑張ってきたんだからよ。一度くらいは弱音を吐いてもいいんじゃないか？

出かけた言葉を飲み込んだ。

これは俺の話すことじゃねえ。俺は共犯だ。

コイツの事を言えた義理はねえ。俺も納得して協力したんだからな。

目の前の機体を見上げる。

あの赤かった機体は、黒い漆黒の鎧に包まれている。

熱血って言うていた姿が、闇に閉ざされる。そんなこと考えちゃいなかったが、考えてみれば同じなんだよな…

「体に支障はないみたいだよ。安静にしていれば数ヶ月もかからず退院するってさ」

「そうか」

「…ふう。それじゃ、この話は今はやめておこうか。とりあえず建設的な話をしよう」

目の前の会話に入ってこれからの事を話し合う。

問題はどうかやってアキトの死亡を軍の奴らに認めさせるか…

- -

「ラピス…入りますよ」

アキト…

「暗いですね…ラピス…寝ちゃってますね」

胸がチクチクする。

私はアキトの目。アキトの…

どうしてずっと一緒にいられないの？

暖かい…アキトと繋がっていると落ち着く。この感覚が私。この感覚がなくな、っちゃう。ゾクって感じて手を握り締める。

なんかやだ。

リンクを強く繋げる。思考の波にアキトを感じる。

もっと。もっと強く。そう思うと、手を伸ばせば届く距離にアキトを感じる事が出来るから。

「…マスターが強く出られない理由が分かる気がしますね。ふふふ。こんな事を考える私は、どこか壊れてしまっているのかも知れませんがね」

ん。

頭におかれた感じがする。アキト？

「起きちゃいましたかラピス？もう。こんな時間に寝ちゃうと夜寝られなくなっちゃいますよ」

……

プイっ。

見たくない。

「ラ、ラピス？あの、私ですよ。ラムダですよ？」

見たくない。

プイっ。

「ラピス？この前約束していた映像を見ませんか！？そうしましよーう！」

………プイ。

「なっ！ほら。ラピス。これなんてどうですか？マスターがラピスを寝かしつけながら自分も寝ちゃったVerですよ！！」

…プイ。

「そ、そうですか。なら奥の手です。マスター　　ではどうですか！！」

ジー。

「か…勝ち……………ジー……」

二人揃って仲良く楽しむと同時に少しは和解できたが、終わって
みれば説得ではなく単に懐柔しただけと頭を悩ますラムダだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778v/>

機械の夢

2011年10月6日12時34分発行